小説 高岡智空
挿絵 くく維きゃん

天使と悪魔と愛欲ケイヤク!

LUST CONTRACT ANGEL AND DEVIL!

立ち読み版

第一章　淫らな天使さん、降臨する　006
第二章　氷のようにクールな悪魔との邂逅　045
第三章　悪魔の修行、変わる日々　088
第四章　悪魔のヒミツ、天使のヒミツ　141
第五章　果たして、大勝利はどちら？　198
エピローグ　251

登場人物紹介

Characters

ラピス

春輝に召喚され、魔界からやってきた悪魔。召喚の代償、そして願いを叶える代償に、彼の大事なものをいただこうとする。

ミゼリア

天界からやってきた淫天使。春輝の願いを知り、悪魔に魅入られないようにと、彼の肉欲まみれの望みを聞き入れる。

里見春輝（さとみはるき）

ラピスに一目惚れし、彼女でドーテーを捨てたいと召喚にチャレンジしたところなんと……!

（そもそも、人間ってのはこう……楽に願いを叶えたがる、即物的なもんっていうか……そもそも俺が悪魔を呼ぼうとしたのだって、なぁ……）

今度はあまり悟られないよう、胸元や美脚の付け根をチラチラと盗み見る。見ているだけで勃起が治まらないどころか、さらに股間が窮屈になってしまうほど、女性の魅力と色香に溢れる肉感ボディだ。しかも吐息だけでなく、彼女の全身から漂っている甘い香気が春輝の牡を煽り続け、すぐにでも押し倒したくなるほど、性欲が込み上げている。

（ほ、本当に天使かよっ、この人！　なんつーか、悪魔じみてるだろ、この誘惑力……くぅぅっ、マジでエッチさせて欲しい、っつーか触るだけでも許してください！）

煩悶に汗が滲み、思わず腰がカクンッと跳ねてしまった。けれど――。

「うふ、大丈夫ですわ、春輝さま……どうぞ、ご安心くださいませ」

「えっ――ひゃふっっ⁉」

グイッと両手を引き寄せられ、顔になにやら柔らかい感触が押しつけられた。それがなんなのか、数秒ほど考えてからようやく気がつき、カァァッと顔中が熱く火照る。

「あふっ、はっ、み、ミゼリアっ⁉　こ、ここ、これって、おおおお、おぱっ――」

「はい、そうですわ……春輝さまを抱いていますのは、わたくしの乳房です……」

耳朶が唇に甘く食まれ、舌先が触れるか触れないかという絶妙のタッチで、チロチロッと舐め擦っていった。耳がまるで性器にでも変えられてしまったかのような、蕩けそうな快感に背筋が痺れ、たちまち身体中が脱力していく。

「昔の天使は、おそらく春輝さまが考えていらした、堅苦しい存在でしたけれど……いまの天使はまったく違う存在ですの。中でも、淫天使であるわたくしは――ね」

ご存知ですか、と鼓膜を舐めしゃぶるような熱い吐息が注がれる。

「淫天使のインは、淫らの淫ですわ……ですから、春輝さま……んちゅ、れろぉぉ……」

「はぐっ、んっっ……あっ、はぁっっ……」

大きく広げた舌に耳を舐め上げられ、すぐさま尖った舌先に穿られる。感じる女のような喘ぎをもらしてしまい、恥ずかしさで頬が赤く染まった。けれどそれを嘲る様子もなく、ミゼリアは優しく抱き留め、ささやきかけてくる。

「春輝さまが悪魔を召喚し、叶えようとした願い……そちらもしっかりと、わたくしミゼリアが叶えさせていただきますわ。悪魔などに魅入られ、唆されぬよう見守るというのは……そういった願いをわたくしが率先して叶える、ということですもの」

「はぅっ、ふぅんっっ……き、気づいて、たんだ……あくっ……」

「ええ、もちろん……んふふ、敏感ですこと……可愛らしいですわぁ……」

耳から首筋に舌が移り、彼女の甘い吐息と同じ香りの漂う、サラサラの唾液が塗りつけられてゆく。たまらず腰が跳ね躍ると、敏感な部分を布の上から押さえるように、彼女の手がズボンの股間を軽く撫でた。

「魔法陣の文字がクセのある形でしたが、見ようによっては、魔界の悪魔を呼びだす術式にも見えましたから……元はそちらにご用がおありだったのでは、と思いましたの。文字

の歪みによって、召喚される対象は変わりますわ……わたくしが召喚されたのは、そのほんのわずかな手違いなのでしょうね。ですが――」
ツゥ……と唾液の糸を引いて、ミゼリアの顔が首筋から離れた。艶めかしい朱に染まる唇が蠱惑的な笑みを浮かべ、彼女の手が自分の胸元に伸びる。
「ここに、あれだけ突き刺さる視線を感じましたら……わたくしも、我慢できなくなってしまいますもの。責任、お取りくださいますか？」
乳首を隠す布が引っ張られ、ハラリと解ける。けれど髪に隠れ、肝心な頂点部分は見えない。それが逆に興奮を誘い、春輝は血走った目を豊かな双丘に向けたまま、呼吸を荒くし、我慢の限界という形相で彼女に問いかけていた。
「つ、つまり、その……いいって、ことかっ？　本当にっ⁉」
「はい、わたくしと契約してくださるのなら……生涯、わたくしを傍に置いてくださり、見守ることを許してくださるなら――そう約定し、誓いの口づけをするだけで……すぐにでもこの身をもちまして、春輝さまの獣欲を解消させていただきますわ」
こちらにキスを、と言わんばかりの仕草で唇をチョンと触り、微かに唇を尖らせる。
（ほ、本当にいいんだろうな、これっ……て、天使じゃなくて悪魔だったり、もしくはいま言われたことが嘘だったりしたら――い、いや、ちょっと待て！）
ヤバいと感じて性欲を抑え込み、なんとか冷静な考えに思考を届かせる。
たしか召喚術の本に、悪魔にとって契約は命より重いものと書いてあった。それがゆえ

に悪魔は、契約に当たっては嘘も誤魔化しもできない、もしも契約においてそれらを行えば、悪魔は力を失って人間の奴隷に貶められるであろう――と。

（だ、から……これは天使さん確定、それで……い、一生、俺の、せ……性欲を――これが、嘘でさえなければ……い、いや！　神様の遺いなら、嘘なんて言わないだろっ⁉）

そんな春輝の考えを読み取ったように、ミゼリアはニッコリと女神のような笑みを浮かべ、ゆっくりと顔を近づけてきた。

「はい、嘘など申しません。春輝さまの貞操、謹んで頂戴いたします……それと――」

言い忘れていましたが、と付け加える淫天使。

「わたくし、先日この役目に就いたばかりで……知識は蓄えましたし、一通りの技術は練習しましたけれど……経験は皆無ですの。いわゆる、初物というやつですわ」

「――っっっ⁉」

ドクンッと鼓動が高鳴り、瞳が大きく見開かれる。そんな春輝の耳元に、さらなる天使の追い打ちが響いてきた。

「淫らなオモチャで様々な淫技を磨いてきました、この処女ビッチ天使に……春輝さまの筆下ろしを、お命じくださいま――あんっっ♪」

プツッと理性の糸が引き千切れ、気がつくと春輝は彼女の肩を掴んで押し倒していた。

「はぁっ、はぁっ……ち、誓うっ！　誓うぞ、ミゼリア！　一生、俺のこと見守ってていいから……今日から、お、お前は……んちゅぅっ……はむっ、んぐぅぅ……」

瑞々しく輝く唇に、自分の口を押し当てた瞬間――電流のような震えと刺激が背筋を這い上がり、快楽に腰がガクガクと跳ねた。それはおそらく、天界との契約を結んだという証明だったのだろう。微かにミゼリアの翼が光り、キスを受けて瞳を閉じた彼女が再び、目を開いて優しく微笑んだ。

「んちゅぅ、れろっ、ちゅむ……んちゅっ、ちゅぱぁ……ふふ、素敵な口づけをありがとうございます、春輝さま……契約――成立ですわ」

一瞬、契約さえ果たせば用済みだとばかりに、蹴り飛ばされはしないかと警戒したが、そんなことはなかった。それどころか背に手を回され、強く、そして柔らかく抱き締められ、今度は彼女のほうから熱烈なキスを浴びせられる。

「今日からわたくしは、春輝さまの性処理天使……自律するオナホール天使となりますこと、誓いますわ。そも、人の本能とは生殖と生存にありますもの……どうぞ遠慮なく、この身を貪り、性の捌け口となさってくださいませ。はぁ……あむっ、んっ……れろぉっ、ちゅぶっ、れりゅぅぅ……んちゅっ、じゅるぅぅ……あぁむぅ、んじゅっ……」

（ふはっ、ふっ……んぐっ、すっ、げ……こ、これ、が……キスッ……）

生き物のようにクネクネと蠢き、柔らかく温かく、そして甘い彼女の舌が、春輝の口内を蹂躙してゆく。唇を舐める動きのままに唇の裏側を擦り、その舌先は歯のエナメル質をチロチロとくすぐって、またもその裏側へ。

「はむぅぅぅ……じゅるるるっ、じゅぶぅぅぅ……ぐちゅっ、れろぉぉぉ……」

口粘膜が、そして歯が蕩けてしまうかと思うほどの、優しくねっとりとした快感の波に、全身が痙攣したように跳ねる。自分が押し倒しているはずなのに、逆に彼女に犯されてしまっているような感覚を強く覚え、その背徳感が下半身の熱を高めてゆく。

「ふぁっ、ふっ……んぐっ、じゅっ……んぅうっ、はぁあっ、んむぅうっ……」

「んふぅっ……ふふっ、んじゅるっ、ちゅぶっ、じゅぽぉぉ……じゅるぉっ……」

たまらず腰を震わせ、股間を彼女のお腹へと押しつけると、唇を塞ぎ合ったままで軽く微笑んだミゼリアは、自らも腰を浮かせてきた。それと同時に舌を吸い上げられる、ヌルヌルとした彼女の口内に舌は容易く飲み込まれ、柔らかく甘噛みされながら舌に擦られ、唇で丁寧に扱かれてゆく。

（はぅおぉぉ……や、ばっ……口、溶ける……みてぇ……）

挟み込まれた舌腹が、天使の唾液で揉み洗いされる。溢れだしたトロトロの粘液は互いの唇を濡らし、そのまま顔を伝って流れ、床にポタポタと落ちていた。

「ふぁ……んっ、ちゅ……ふふっ、春輝さまとのキス、とっても気持ちがいい……」

舌から長く唾液の糸を伸ばしながら、彼女の顔が引いてゆく。春輝が熱に浮かされたような表情でそれを見つめていると、クスッと唇を緩め、甘いささやきが耳奥に響き渡る。

「寝台に参りましょうか、春輝さま……」

背中を抱かれ、手の平に膨らんだ股間を優しく撫で上げられる。思わず射精してしまいそうな快感に腰を引き、慌てて立ち上がると、風俗嬢がそうするような手つきで手を引か

れた。九十センチはありそうなヒップが薄布を透かし、豊満な尻肉をくねらせて前を歩く。白雪のようなくすみのない肌、溢れる肉感、すべてに牡欲をくすぐられ、大量の溢れたカウパーがズボンの中、下着をグチャグチャに汚していた。

「どうぞ、そこにお立ちになっていてくださいな……いま、楽にして差し上げますから……うふっ、逞しい牡棒ですのね。衣類の上からでも、熱さと猛りを感じますわ」

ベッドに座り込んだ淫乱天使が、その脇で棒立ちする春輝のズボンを脱がしにかかる。夏場の部屋着ということで楽な七分丈ズボン、そのボタンを外してファスナーを下ろし、焦らすようにゆっくりと布地が脚を滑り降りてゆく。

（くっ、あぁぁ……早くっ、早く早く早くぅっ！）

ズボンが床に落ちても、ペニスの上にはまだ下着がある。トランクスを大きく膨らませ、ひと際突き上がった先端には黒々と染みが広がっていた。だがそれを気恥ずかしく感じることもなく、むしろ誇示するように腰を突きだすと、微笑みを浮かべた淫天使の唇が、なんの前触れもなくそこに口寄せられる。

「んっ……そうですわ、春輝さま……このまま一度、下着の中に射精なさるというのはいかがでしょう？　下着越しのフェラチオというのもよいものですし……それに、一度射精なさっていれば、わたくしの膣内でも長持ちしていただけるかと……それとも――」

触れるか触れないかという絶妙の距離、そして時折、吐息を絡めながら唇が軽く押し当てられ、そのたびに腰が浮き上がりそうになる。気を抜けばすぐにでも射精してしまいそ

うだが、なんとか肛門を引き締めて射精欲を押さえつける。それは男の沽券だとかそういう問題ではなく、ただ単純に、しっかりと奉仕してもらいながらイキたいという、ストレートな欲望からだった。

「それとも――筆下ろしと同時に果て、わたくしの膣内で瞬殺されたいですか？」

挑発するような上目遣いで、彼女が舌をくねらせる。垂れ落ちた唾液の雫がトランクス越しの亀頭に落ちて、布地に染み込んだ熱さが直接、牡粘膜を蕩かしてゆく。

（こっっ……このっ、淫乱天使っ……ンなのっ、どっちもしてーに決まってんだろ！）

だがそこで、春輝の精神内に潜む冷静な判断力が、極めて合理的な思考を生んだ。

（たしかに、パンツ越しのフェラはされてみたい、けどっ……瞬殺の童貞喪失とか、童貞のときじゃないとっ……しかもこんだけ溜まってて、追い詰められてるときじゃねーと……絶対味わえないだろうが！　ってことで、俺の答えは――）

「んっ……ほぉあぁ、んべぇぇ……どうなさいますの、春輝さま……」

伸びた舌先が尖り、その先端から花蜜のような唾液がトロリと滴り落ちる。ヌルついて黒く染みの広がる下着をそのまま舐めて欲しい、そんな感情をなんとか抑え込み、声を上擦らせながら春輝はミゼリアに訴えかける。

「フェ、フェラはまた今度頼むっ……いまは、とにかく……挿れさせてくれ！」

さすがに、瞬殺して欲しいなんていうみっともないお願いを口にはできなかった。けれどミゼリアは、こちらの本心などお見通しというように微笑み、ベッドにスペースを作っ

て、シーツの上をポンポンと叩く。
「ふふ、承知しましたわ……では、こちらへ横になってください……」
誘われるままにベッドにダイブし、布団の上で横になった。その様子を笑顔のまま見つめていた天使は、自然にめくれ返ってしまいそうなほど膨らんだ春輝の下着に指をかけ、淫らな視線で舐め回しながら、ゴムを引っ張ってそれをずらし下ろしてゆく。
「まだイカないでくださいませね、我慢ですわよ……んぇ、へぇぇ……」
「わ、かって……るっ、くふっ……うぅぅ……」
脱がしながらも、大量の唾液が彼女の唇から流れ、それは亀頭ではなく下腹部へと注がれてゆく。生温かくヌルついた感触に肌を撫でられ、またも切なそうに脈動したペニスが、ビクンッと跳ねて滾る肉欲を訴える。
「うふふふ、可愛らしいですわぁ……んっ、まぁ……素敵ですこと♥」
先端をゴムに引っかけ、それを外された瞬間に反り返ったペニスがバチンッと弾かれ、下腹部を強く叩く。衝撃に透明の雫が跳ね、下着を剥いた彼女の指先にわずかに降りかかった。ミゼリアはそれを口元に運び、淫靡な笑みを湛えた唇に運び、チュパチュパと舐め回す。舌を伸ばし、あるいは唇を尖らせて——男を誘惑し、視線を釘付けにさせる卑猥な表情をいくつも作り、暴発寸前の肉棒を本当に暴発させようとしているようだった。
「想像していたものより、とても大きいですわ。これが本物の、殿方の性器なのですね……雄々しくて、逞しくて、それでいて可愛らしい……愛しくなってしまいます」

彼女の蕩けた声音を聞いて顔を見つめると、完全に発情したような真っ赤な表情を見せ、瞳が熱く潤んでいるのがわかった。

「それでは、春輝さま……これから春輝さまのモノとなります、わたくしの……ア・ソ・コ……ご覧になってくださいませ」

見つめられているのに気づいたミゼリアが微かに頬を染め、はにかみながら身に着けていた薄布を解こうとする。すぐさま股間を覆っていた布がハラリと外れたが、肝心の部分を手で隠し、春輝の牡欲をこれでもかというほど焦らし、昂らせていた。

「うふふ、血走った目線ですこと。感じてしまいます……では、どうぞ」

（ふぉっ、ほぉぉぉっっ……っっ！　こ、これが、女の子の……お、オマ、ン……）

直立のような姿勢でベッドに横たわる春輝の両脚を跨ぎ、天使が膝立ちになる。両手を使ってその部分を割り開き、思春期真っ只中な少年の視界に、すべてを曝けだした。

「んっ、ふぅぅ……こうして、実際に見つめられると……恥ずかしい、ですわぁ……」

そんな言葉を吐きながら彼女が腰を捩るが、春輝の視点はその部分からまるで揺らがなかった。自らを処女だというミゼリアの言葉を裏づけるように、少しのくすみもない桃色の粘膜はいやらしく充血し、薄暗い部屋の中でテラテラと淫靡な輝きを放つ。先ほどまでのキスや、春輝とのやり取りでそれほどに感じていたのだろうか、見ただけでそうとはっきりわかるほど、彼女の秘部は濡れ綻んでいた。

「い、いかがでしょう、春輝さま……お気に召しましたでしょうか？」

「お、う……あ、あぁ、すげぇ……めちゃくちゃ綺麗で、しかもっ……エロいっ！」
小陰唇に指を割り込ませて淫裂を晒し、ヒクつく狭穴までがはっきりと見える。薄いピンク色の粘膜は彼女の髪と同じ金色の恥毛で飾られ、その奥からは透明の雫が絶え間なくトロトロと染みだし、秘部全体を濡らしていた。
膣口は常に蠢動し、まるで呼吸しているように見える。そこがどんな感触なのか、どんな味がするのか、匂いはどうだろう――それらを想像するだけで、下腹部に反り返ったペニスがビクンッと跳ね上がり、淫らな天使に牡欲を訴えかけた。
「ミ、ゼリア……はや、くっ、早くしてくれっ、もう……っ」
「承知いたしました……うふふ、本当でしたら、わたくしのオマ〇コをご覧になっただけで吐精なさる春輝さまも、見てみたいのですが……」
言いながらミゼリアの細い指先が肉棒の根元を掴み、ゆっくりと先端を持ち上げてゆく。溢れるカウパーはすでにペニス全体を湿らせ、彼女の指にもニチャニチャと絡みついていた。その感触を楽しむように、淫天使が指をリズミカルに動かして根元を叩くと、射精欲がさらに強く刺激され、肛門の奥がギュッと押し込まれたような感覚に苛まれてゆく。
「恥ずかしながら、わたくしも限界ですので……春輝さまの童貞チンポ……血管が浮きだしてバッキバキに勃起なさった、この逞しい牡を……食させていただきますわ」
垂直に上を向かされた肉棒の半分くらいまで、精液が込み上げているのを実感する。その状態で固定されたまま、ニチャァァ……と音を響かせて彼女の淫肉が、亀頭の先端に吸

いついてきた。熱く蕩けた果実か糖蜜でも注がれたかと思うような、熱さと粘っこさに肉棒が支配されてゆく。衝撃に腰が跳ね、亀頭が強く彼女の膣口を押し開く。

「はふぅぅんっっ♥　んっ、も、もう、春輝さまぁ……暴れん坊、さん♪」

膝立ちから背筋を反らし、甘い悲鳴をもれこぼしたミゼリアが、うっとりとした笑みでこちらを見下ろす。窘(たしな)めるような慈しむような、年上特有の優しい視線に下半身が蕩け、限界でこらえていた射精がまた一段、尿道口目がけて駆け上がってくるのを感じる。

そして、それと同時に――。

――チュブゥッ、グチュッッ、ニチュゥゥゥ……ブチュルゥゥッッッ！

「ひゃうぅぅぅんっっ!!　んっ、ひぃっ……あっ、ひぁっ、ふぁぁっっ……」

ブツブツゥゥッと薄い膜襞を引き裂くような感触がペニスに伝わり――その刹那。

先ほどの口づけで感じた舌の感触をよりねちっこく、より熱く、そしてより柔らかくした快感が亀頭の先から根元まで、肉幹全体を包み込んでゆく。

（うっっ、くっ……ふおぁぁぁっっ!!　なんっ、だっ、こ……これっ、はぁうっ！）

まるで強く握られてでもいるような、狭い膣壺の感触に肉棒を締めつけられ、扱かれながら膣奥にペニスを吸い上げられる。膣内はヌルヌルとして大量の熱い蜜汁に溢れ、少し進むたびに膣奥からグチュグチュと卑猥な粘水音を奏でていた。

その粘液の絡む膣肉は複雑な段差が広がり、予想もしないタイミングでペニスを擦り、締めつけ、無数の舌を押し当てるような刺激で絶え間なく責め立てる。さらには細かな肉

粒で敏感な牡粘膜を擦られ、頭の中はすぐさま真っ白に染め抜かれてしまった。
（あっ、ふっっ……ま、まず、いっ、これっ……あぁぁっっ！）
甘かった、そんな感情だけが込み上げる。先ほどミゼリアが口にしたことを経験したかったのは事実だが、さすがにそうはならないだろうと高を括っていたのも否めない。
しかし彼女の肉壺を味わってはっきりと実感する、このまま我慢するのは不可能だと。
「ミゼ、リアッ……あぁぁっ、ごめっ、んっ、もうっっ……」
破瓜の痛みに少しだけ眉をひそめている天使に犯されたまま、震える声で謝罪する。それを聞いた彼女は強張りかけた表情を緩め、両手の指を春輝のシャツに滑り込ませた。
「はい、いつでもどうぞ……わたくしのオナホマ〇コに、たっぷりとお射精を♥」
「あぐっっ、い、イク、はっ……んぐっっ、イクッ、イクぅぅぅっっ！」
脇腹を撫でる指の感触に痙攣した瞬間、快感で硬くなっていた乳首を指で擦り立てられた。それと同時に彼女が完全に腰を落とし、熟尻がムニュッと春輝の腹と太ももを押し潰してくる。亀頭の先には弾力ある膣最奥の壁が押し当てられ、大量の牝蜜とともにペニスを弄り、射精を促して扱き立てた。それらの快感に牡欲を掌握され、下半身を脱力させた春輝は滾る欲望を、躊躇（ためら）うことなく解放する。
――ドビュゥゥゥッッッ！　ビュクビュクッ、ドビュルゥゥッ！　ビュルゥゥゥ～～～～～ッッ！　ビクビクッ、ビュクンッッ！
（くはっ、はぁぁぁ～～～～～っ……んぐっ、す、吸われる、根こそぎっ……）

第四章　悪魔のヒミツ、天使のヒミツ

「ではマスター……本当に最低で、腹立たしいことこの上なく、絶対にしたくないことではありますが――この天使に現実を思い知らせるため、少々お付き合い願います」
「い、や……そ、そこまで嫌なら、やめといたほうがいいんじゃないかなー、なんて……あ、はっ、はははははっ……はぉうっっ⁉」
笑って誤魔化そうとした瞬間、シルクの棒で擦られたような、甘く柔らかな感触が裏筋を撫で上げ、亀頭のサイズを測るように肉傘を一周してゆく。
「なにかおっしゃいましたか、マスター？　よく聞こえませんが」
「へっ……や、だ、だか、らっ……あくっ、ふっ……んぐぅっ……」
見れば悪魔少女は、口元に緩やかな笑みを浮かべ、こちらの反応を凝視しながら指先でペニスを苛んでいるだけだった。だがそれだけで、声が上擦って腰が抜けてしまいそうなほど強烈な快感が肉棒を支配し、股間に顔を寄せているミゼリアの目の前で屹立していた牡槍が、先ほど彼女の膣内に精を放ったとき以上の勃起を晒してしまう。
「なっ――くっ、うぅっ……ふ、ふふっ、たしかに、口だけではないようですわね」
「そうですね、口など使わずとも手だけで十分でしょうけれど……まぁ、マスターに夢のような時間をプレゼントするのも、やぶさかではありません。特別にフェラしてあげます

から……数分ももたないかと思いますが、堪能してください」
噛み合っているようでまるで噛み合っていない会話をしつつ、艶やかなツインテールを揺らして、ラピスもミゼリアの隣に座り込んだ。
ミニスカのゴスロリドレスが翻り、男を誘うようにドロドロと濃厚なモノとは違う、甘く爽やかな香気が振り撒かれる。香水でもつけているのか、それとも彼女自身の香りか、あるいは毎日熱心に堪能している入浴時についたシャンプーの香りだろうか。
思わず鼻をヒクつかせてそれを吸い上げてしまうと、スンッと想像以上に大きな音が響いてしまった。ミゼリアは驚愕に大口を開いて、そしてラピスは勝ち誇ったような笑みを浮かべてニヤニヤと、共に春輝の顔を見つめていることに気づく。
「あ、やっ……ち、違う、いまのはっ……」
「いまの、とはなんでしょうか、マスター？」
からかうような笑みを浮かべたこの悪魔さん、間違いなく春輝が鼻を鳴らしたことに気づいているはずだ。その上で春輝の口で告白させるなど、相当な性格の悪さである。
（なのに……あぁぁぁっ、もう、可愛いんだよっ！　くっそ性格悪いクセにっ……）
そう思いながらも春輝は、赤面した顔を背け、短く答えた。
「別にっ……な、なんでもねーっての……」
「そうですか。私はてっきり、ド変態のマスターが私の体臭を必死に追いかけて、鼻でも鳴らしてしまったのかと思いましたが……気のせいならば、なによりです」

「――っっ……っそ、くぅぅっっ……」

正直なところ、春輝は彼女のことを甘く見ていた。いざセックスが許されたとしても、彼女の誘惑にもそう簡単には乗らず、駆け引きの一つもしてみせる――なんてことを考えていたのに、いざ行為に及べばこの体たらく、自分の考えがいかに甘かったかを思い知らされる。だがそのくらい彼女は、容姿も仕草もすべてが魅力的だった。

その事実を、香りを吸い上げるという自らの行動で再認識させられた挙句、それを彼女にはっきりと指摘された、まさに完全敗北である。顔は耳まで真っ赤に火照り、これ以上はないというほどの羞恥を感じさせられる。それでいて勃起は萎えるどころか、ますますいきり立って跳ねているというのだから、もう本当に情けなくてたまらなかった。

「春輝さま、そんなっ……そんなに、悪魔のほうがよろしいと……っ」

「っっ！　ち、違うって、これは……そ、そうっ、ミゼリアだよ！　ミゼリアとのエッチ思いだして、興奮しただけだっていうか……あっ、いまのもそうだぞっ？　ミゼリアの髪、すげーいい匂いだったからさ。それを追っかけてただけだから、うん！」

我ながら子供さえ騙せないだろと思うような、説得力の欠片もない言い訳だ。しかしそれでも、天使さんのプライドをほんの少しは守ってやれたらしい。複雑な表情ではあるが、それでも微かな安堵を浮かべ、ミゼリアが微笑む。

「ありがとうございます、では……お褒めいただいた分も、お返しいたしませんと」

そして一方の悪魔さん――こちらはいたくプライドを傷つけられたらしく、不機嫌極ま

りないオーラを醸しだし、すべての憤りを冷たい眼差しに変換していた。
「――まだそんな言い訳をするのですね、これほど厚顔無恥とは思いませんでした」
もしかするとあの香りや、それを振り撒く仕草は、悪魔特有の誘惑だったのかもしれない。ならば、それを受けながらも事実を誤魔化した春輝はまだ、彼女のすべてに溺れさせられたというわけではないはずだ。
（うっ……よ、よしっ……なら見せてやる、それで驚かせてやる！　どれだけテクに自信あるか知らねーけどなぁっ、俺だってそれなりに経験はして――っっ⁉）
そう意気込んだのも束の間――先端にラピスの細い唇が触れた瞬間、自分の経験をすべて吹き飛ばしてしまうような、圧倒的な快感というものを思い知らされてしまう。
「では、失礼します……はぁっ、んむっ……んじゅっ、じゅるぉぉぉっ……」
唇に表面をなぞられたと感じるのとほぼ同時、窄められた柔粘膜から大量の唾液が降り注ぎ、まるで膣内かと錯覚するような甘い感触にペニスが包まれていた。咥え込まれたかと思い、反射的に股間を見て、それが間違いだったことに気づく。春輝の分身に甘く絡みつき、蕩かすような熱さと吸いつきで扱き上げてくる快感は、彼女の口内ではなく唾液の感触だけで覚えさせられているのだ。
（なんっ、だっ、そりゃぁぁぁ――っっ！　えちょっ、な、なんでっ……あぐっ、くあぁぁぁっ！　や、ばっ……待って、いま吸われたら……くっ、ふぅぅっっっ⁉）
歯を食いしばり、お尻に力を込めて、込み上げた欲望をなんとか抑え込む。けれどそん

な春輝の抵抗を嘲笑うかのように、窄まった悪魔の唇が強く押しつけられ、綻ぶ花弁のように開いた桃色の口腔へと、跳ね震える亀頭が飲み込まれてしまう。

「あぁむっ、んぐじゅっっ……じゅぶぶぶぶぅぅぅっっ、じゅるるるんっっ……」

「はぐあぁぁっっ!?　ちょまっ、な、なにこれっ……ふおぉぉぉっっ！」

唇の表面が触れた瞬間は、少し冷たいかなと感じたくらいだというのに、その小さな口腔は信じがたいほどの熱を孕んで、熱く滾っていた春輝のペニスを、さらに熱く煮蕩かしてゆく。舌に乗った唾液は噛み砕いた粥のようにトロトロと粘膜を撫で、生き物のようにペニスを扱いていた。

「はっ……はる、き、さま……あ、わ、わたくしもっ……」

そんな天使の戸惑いも届かないほど、肉棒を包んだ悪魔の快楽に意識が奪われ、彼女の舌が口内でうねるたび、腰をガクガクとのたうち回らせて肉悦に喘がされる。

（やっ、やばっ、こんなっ……し、舌に扱かれて、飲まれてるっっ……あぁぁっ！）

長さは普通よりやや長いかもしれない、けれどそこまで目を見張るような、人外の舌ではなかったはずだ。けれどラピスの舌は肉棒全体に満遍なく唾液を塗そうというように、クルクルと根元から螺旋を描いてペニスを舐め上げ、舌腹で丁寧に擦りながらも、舌先は巧みに要所をくすぐってゆく。

横笛を吹く仕草に似た、吸いつきフェラの感触が肉幹の裏側に這い、張りついた舌が直接尿道を舐めて、精液を誘っているかのようだった。たまらず腰を浮かせると、窄まった

口腔に亀頭を吸われ、そのまま余り皮もろとも激しいシャフトで扱かれてしまう。
「まっ……待、てっ、ラピっ……うっく、くぁっ、はぁぁっ……」
声を上げようとすると、それを遮ろうとしているのか、ラピスの口撃にますます力が入ってきた。下歯で甘く裏筋を擦られ、舌先は尿道を穿りながら、牡欲を苛む悪魔の唾液を注ぎ込んでくる。それだけで制止の声は嬌声にすり替わり、まるで彼女を求めているようにだらしなく掠れ、淫熱を込めたささやきに変化する。
（う、そだろっ……マジで、これじゃっ……もっ、イ……イカ、されるっ……）
抗議というわけではないが、下腹部に顔を埋める少女の頭を見下ろす――と。
「――っっ⁉」
上目遣いにこちらの見つめ、反応を窺っている悪魔の笑みと視線が合った。真紅に染まった瞳はこちらの官能を見通し、無様に悶える主人を見つめて唇が、ニヤニヤと嗜虐の笑みを浮かべている。羞恥と反発にカァッと赤くなって唇を引き締めても、すぐさまこちらの反応を見ながらラピスは舌をくねらせ、頭を激しく振り立てた。
グポッ、グプッ、グニュプゥッッッ！　と肉と擦れ合う淫らな水音が跳ね響き、春輝はすぐさま快楽に身を委ねてしまう。顔を上向かせあごを上げ、腰を浮かせて背後にもたれるような、股間を悪魔の支配に預けてしまう、完全屈服のポーズだ。
「んぶっ、くふぁぁ……はんふきていろのくんぇんれは、こんらもろれふかぁ……あむっ、んちゅっ、んじゅぅぅっ……ほんろぉに、だらひないれふね、まふたーは……」

「ふぁぐっっ……んもっ、そ、それやめっ……く、咥えながら、話す、なっ……」
なんとかそれだけを告げる、だがそれは、悪魔に対して弱みを見せつけるだけの行動にすぎなかった。こうですか？　と口内でモゴモゴと呟きながら、微妙な頬粘膜と舌の動き、そして歯の擦れる甘痛い肉悦を容赦なくペニスに注ぎ込み、ラピスの淫技は陰嚢の奥に詰まった精液を煮え滾らせてゆく。
（やめっ、ろ、マジ……ぐっ、あっ……はっ、はぁっっ……あづっ、ふぅぅっ……）
ペニスがビクビクと躍動するのに合わせ、陰嚢がキュッと持ち上がり、お尻の奥が弛緩して精液を解放しそうになる。我慢するというよりも、思考を放棄することで身体の感覚を切り離し、なんとか射精を免れているような状態だった。だが、そこへ――。
「春輝さま、こんなに苦しそうに金玉をヒクつかせて……わたくしがお慰めいたします、しばしの我慢を……はぁ、んっ……んぇろっ、ふぇおぉぉぉ……んじゅるっ……」
（お前なにしてんのぉぉぉぉぉ――っっっ⁉）
色素の薄い悪魔のそれと違い、こちらは真っ赤に色づいた、ダリアの花弁のような舌が広がる。そこに熟成した陰嚢をポテッと重そうに乗せ、転がしながら唾液を塗してゆく、その淫猥な光景に背筋が震え立つのを止められない。
「邪魔ひらいれくらはい、へんひぃ……んじゅるれろぉぉぉぉっ、れりゅっっ、んぢゅぢゅぢゅっ、じゅるるんっっ……ぐじゅっ、じゅっぷじゅっぷちゅぽぉっ……」
「わらくひは、はりゅきひゃまをぉ……んれろっ、れろっ、じゅるんっ……んちゅっ、ち

ゆぱっ、ちゅぅ〜〜〜〜〜〜……んぽぉっっ♥　おなぐひゃめ、ひてるらけれすわぁ……」

（だからやめて二人ともぉぉぉっっ!?　話しながらっ、な、舐めんなぁっ！）

言葉を発するたびに粘膜が振動し、微弱な刺激があらぬ方向から肉棒に、睾丸に注ぎ込まれてゆく。陰嚢の皺の間にまで天使の唾液が塗り込まれ、流れたトロトロの蜜液は、ペニスから垂れてくる先走り混じりの悪魔唾液と混ざって、ヒクつく肛門に密着してしまう。その感触だけでも、まるでアナルを舐められているかと思うほどの、背筋が震え立つ快感を味わわされていた。

（やっべ……前立腺っ、ひ、響いてるっ……あぐぅぅっ！）

肛門の粘膜がヒクつくたびに、垂れてきた唾液がチュッチュッと吸い上げられ、熱く粘っこい感触に前立腺を侵されてゆく。天使の指先で何度も責め苛まれた快感が甦り、自然と膝が震えて腰が跳ね上がってしまった。

それを悪魔少女の小さな唇がしっかりと受け止め、ローションのような唾液で満たされる熱々の粘膜襞で、執拗に扱き上げられる。もはや甘い奉仕ではなく、主人から精液を搾り取って主従関係を逆転させようとするかのような、力の差を見せつける嵐のごとき快感に下腹部が言うことを聞いてくれない。

ラピスの口内はまるで、いくつもの小さな唇が花咲いているようだった。粘膜に包まれているだけでも、その一筋一筋が肉棒に吸いついてスライドし、あるいは絡みついて、熱烈なディープキスのように唾液を塗して舐め擦ってくる。その感触が幾重にも重なって、

舌に巻きつかれて扱かれているような、肉悦の錯覚を刻み込まれているのだ。
もちろんそれだけではない、現実の彼女の舌は指先のように彼女の意思のままに動いて、肉棒のあちこちを子犬のように舐め回している。剥き上げられた包皮の内側にまで先端が滑り込み、すべてを自分のものだと主張するように、トロトロの唾液を塗り込んでいた。想像もしなかった敏感な部分を刺激され、春輝は両手を腰の横について両脚を開いたまま、ただ快感に翻弄されて喘ぎ続ける。我慢しようとしても、天使の唇が絶妙な力加減で陰嚢をしゃぶり、転がすせいで下半身に力が入らず、尿道が押し開かれていくのに任せて身体は弛緩し、絶頂欲をこらえることなど不可能だった。
（も、だ、めだ……はっ、ぐっ、うぅぅぅっっ！）
じわじわとせり上がってくる、濃厚な精液の感覚を把握し、ゾクゾクッと背筋が震える。その感覚は肉棒をしゃぶっているだけのラピスにもわかったようで、さらに唇の締めつけが強くなり、柔らかなリップリングがペニスを根元まで扱き下ろし――。
「はぉむっっ……おぐっ、んっっ……んじゅるぅぅぅぅぅ～～～～～っっっ!!」
「くっっあぁぁぁぁぁ――っっっ！　ダメだっ、もっっ、イクッ、イクぅぅぅっ！」
そのまま頭を揺すって唇に回転運動を加えながら、張りだした肉傘のギリギリ、裏筋を擦る位置まで一気に引き抜かれる。途端に目の眩むような肉悦を撃ち込まれ、春輝は意図しなかった絶叫を本能のままに張り上げながら、込み上げた欲求を口内に溢れさせる。
――ドプッッビュルゥゥゥッッ！　ビュクビュクビュルゥッ、ビュルゥ～～ッッ！

「んんむぅぅっっ……んふぐっ、じゅぶろぉぉぉっ、んじゅぶっ、じゅぶるっっ……」
軽く呻きながらも、すぐさまペニスの脈動に合わせて悪魔の唇が精液を啜る。使ったことはないが、掃除機でペニスを吸われるとこんな感覚なのだろうか。粘膜のピッタリと張りついた濃厚なバキュームフェラで、睾丸から直接精を吸い上げられるように、牡液がドップドップと噴き溢れてゆく。
それをしっかりと味わっているのか、口内に生温かい粘液が含まれ、咀嚼するように口内粘膜から唇、歯や舌に至るまでが躍りうねる。ペニスを弄びながら、塊になった精液をしっかりと攪拌し、さらに新鮮な精を吸い上げながら、ラピスはジッと春輝の目を見つめたまま、コクンコクンと可愛らしく喉を鳴らしてすべてを飲み下していた。
「あむっ、んじゅぅっっ……ちょっほ、悪魔っ……わたくしにも、残して――」
「むりれふね、ひょれは……んくっ、んじゅるぅぅ……んぁっ、ふぅんっ……」
頬を赤く染めて、やや陶酔したような表情を浮かべながら、ミゼリアの主張を退けて亀頭から唇を離さないラピス。さらに一度、大きく腰を跳ねさせて打ち放った精液を舌に包み取り、亀頭に押し潰しながら滑らかにし、それを丁寧に舐め啜ってゆく。
「くはぁぁっ、あっぐ、はっ……ふぁっ、ふぅぅぅ……」
「んっ……んじゅるっ、れろぉぉっ、んれろっ、ちゅぱぁぁ……んっぷぁっ♥　ふぅ……いかがでしたか、マスター……といっても、答えるまでもなさそうですが」
勝ち誇ったように彼女がそう告げるも、それが事実だけになにも答えられなかった。十

数分くらいはしゃぶられていたかと思ったのに、時計を見るとまだ三分ほどしか経っていない。それだけ濃厚な奉仕をしてくれたことを嬉しく思いつつも、彼女のとんでもないテクニックに戦慄せざるを得なかった。
「言っておきますが――いまのは私の技術の、ほんの一端にすぎません。ですが、これで理解できたことでしょう。こと性技に関して、魔界が天界に劣るなどあり得ないと」
悪魔少女が唇を指先で拭い、わずかに残っていた精の残滓を赤らめた顔で見つめたまま――それをゆっくりと唇に運び、ペロペロと舐める。主人を屈服させ、主人の精を心行くまで堪能した達成感で、少しばかり熱に浮かされているようにも見えた。
（たしかにすごかった……イッたばっかのいまでも、夢みたいな感覚が残ってる……これは言うだけのことはあるなぁ、マジで……）
けれど、春輝の視線や意識は、それほど強い快感を与え魅力を見せつけたラピスではなく、まずはミゼリアのほうへと向けられる。
「そんな……こんな、こと……これでは、春輝さまにっ……」
自分もそれなりのショックを受けはしたが、彼女はそれに加えて自信まで喪失させられ、呆然自失となっているようだった。瞳を潤ませ、愕然と四肢を脱力させる天使の姿を見て、春輝はたまらず彼女に手を伸ばし、気遣いながら抱き寄せる。
「ミゼリア、大丈夫か？　ほら、こっちおいで……よっと」
「えっ……きゃぁっ!?　えっ、あ、あのっ、春輝、さま……んっ……」

膝の上に乗せて軽く口づけるだけのキスをし、頭を優しく撫でてやると、戸惑いを見せた天使はすぐさまおとなしくなり、春輝の腕の中でネコのように甘えだした。
「あぅっ、ふぅぅん……春輝さまぁ、わたくしなどにこのような、もったいないですわ……それとも、悪魔に――ラピスに性技で敗れたことへの、慰めでしょうか？」
「――そうです、どういうつもりですかマスター。私に屈服させられたことの誤魔化しですか、これ見よがしに天使を可愛がって、牽制の意図でもあるのですか」
片や幸せそうに瞳を細め、もう片方は冷たい瞳をつり上げて、甘えながらの熱い吐息と糾弾する冷たい響きが二人から発せられる。だが春輝は首を振り、身体の片側を開けて、ラピスのほうへも手を伸ばした。
「まぁ、半分はミゼリアの言うことが正解――なんつーか、テクの差を見せつけられてショック受けてそうだったからな。けど、それだけじゃないぞ？」
「ではそちらを聞かせてください。それと、この手はなんですか」
にべもなく、ツンとした態度で悪魔少女がそう返すが、手を取るべきかどうか、思案しているような瞳の動きが、なんとも可愛らしかった。
「ラピスもしていいなら、このくらいはさせてもらうぞってことだよ。その、二人ともすげー気持ちよくしてくれたからさ、お礼……ってのもおかしいけど、えーっと……そう、後戯！　後戯ってやつだ、あるだろ？　終わったあとにイチャイチャするっていう」
なんとか見つけた言葉を繋げ、説明すると、合点がいったようにラピスが頷いた。

結局クリトリスには触れないまま、挿入の誘惑に抗えなくなってしまった。クリトリスへの快感を執拗に焦らされ、おもらし直後のように股間をベトベトに濡れそぼたせ、太ももから膝まで、身体のほうは腰からお腹まで愛液を飛び散らせ、脱力した肢体を投げだしたラピスは、ズボンを脱いだ春輝の前で、腰を小さく痙攣させている。

（やっばぁぁぁ……なんつーか、イキかけでヒクつきまくってるマ〇コ……しかもぐしょぐしょで、布団までおもらししたみたいで……エロすぎっ……）

舌の抽挿を繰り返したこともそうだが、その直前までの愛撫でもとっくに、ラピスの肉壺は準備ができていた。膝を曲げさせても抵抗はなく、ヒクつく粘膜壺の入口を優しく撫でる、ただそれだけで彼女のお尻が可愛らしく揺れ、秘唇から牝蜜が垂れ落ちる。

透けるような白い肌が透明の粘液で濡れ光る、その光景に興奮を高められ、激しく屹立するペニスを掴み、彼女の身体に身を寄せながらささやく。

「ラピス、そろそろ……こんな形で申し訳ないけど、も、もらうぞっ……」

「んっ……はぁ、い……しょぉが、ない、まふ……んっ、マスター……ですね……」

意識が朦朧としているのかとも思ったが、そうではないらしく、ラピスが軽く頭を振って呂律を戻しながら、珍しい柔らかな笑みを浮かべて見せた。

「ですが、いいですね……これは、契約です……必ず、あなたには果たしていただきますから……そうじゃなければ、許しませんっ……」

M字に開いた脚の間に身を進め、灼けるように熱く勃起したペニスの先端を、彼女の秘

部に押しつける。潤んだ牝肉の感触に亀頭が蕩けさせられ、触れているだけでキスするように吸いつくその感触は、以前に味わった彼女のフェラチオの数倍ほども気持ちがいい。

暴発してしまいそうな牡欲を宥めつつ、ラピスの頭を撫でて春輝は答える。

「あぁ、絶対に……俺の魂の輝き、ラピスに捧げる……だから――」

「んっっ♥　くぁっ、ふっ……い、いいですっ、マスター……きて、くださいっ……」

ゆっくりと膝を進める、それに合わせて膣肉を割り開き、肉棒が彼女の純潔をメリメリと突き破ってゆく。多少の痛みは感じるらしく、眉根をひそめた苦悶の表情を見せながら、悪魔少女は気丈に声音を引き締めて、春輝の腰を抱き寄せる。

「――ラピスの処女、もらうぞ……くっ、ふぅぅっっっ！」

背筋がゾクゾクッとわななき、快感の蜜壺にペニスが飲み込まれる。あれだけの口技を披露していた悪魔の膣壺なのだから、かなりの快感を想像していたが――。

「や……ばっ、こ、これっ……マジ、すごっ……くぉぉっ……」

その想像を軽く置き去りにするくらいの、凄まじい快感が亀頭を撫でて肉幹を駆け下り、春輝の下半身を弛緩させ、前立腺を捏ねくり回すように刺激していった。込み上げる精液を歯噛みして堪え、小柄なラピスの肢体を強く抱き締めながら、ガクガクと跳ね震える腰をなんとか押し進めてゆく。

――グチュニュゥゥゥゥッッ……チュブブブッ、ジュブッ、グチュゥゥッ……。

「くふぁっ、はっ……ぅっ……つぅぅっ……あっ、は、い……って、りゅっ……」

凄まじい快感に耐える春輝とは対照的に、腕の中で身悶える悪魔少女は、想像以上の痛みを堪えているようだった。

それもそのはずだ、亀頭を捻じ込んだ時点からわかっていたが、ラピスの牝壺はどうしようもなく狭まっている。それでいて蕩けるほど柔らかく、熱々の蜜汁に満たされていた。数ミリ押し進めるだけでも、秘部のわずかな隙間から蜜液がビュルビュルと噴きだし、濡れた肉襞が硬くいきり立つ牡肉で引き裂かれてゆく。これだけ濡れていても、狭い膣肉を無理やり押し開き、開墾していく感覚が拭えない。だがその征服感と、推し進むたびに咥え込んだペニスを舐めしゃぶる牝肉の圧力が、春輝の官能を燃え上がらせ、強烈な射精欲を誘って快感を与えてくる。

（うぐっ……めちゃくちゃ、気持ちいいっ……けど、ラピスは大丈夫なのか……？）

いわゆる正常位の体勢、けれど彼女がお尻で布団に座り、春輝にしがみついているせいで、座位に近いかもしれない。そのせいで彼女の膣内に、普通以上の負荷がかかっていては、痛みが倍増していてもおかしくはない。

「ラピス、大丈夫かっ……ちょっとだけ我慢してくれよ、ほら……」

「はっ、ふっ……んぅっ、ます、たっ……だ、いじょう、ぶっ、ですぅ……んっ――」

気遣うように声をかけ、頭を撫でながら同時に、髪の毛に埋まりかけている角先も優しく扱いてやる。そうされると落ち着くのか、うっとりと瞳を細めたラピスが、腕の中で身体を弛緩させた。そのまま髪を梳き、背中を撫で、甘える子犬のような鳴き声を聞きなが

ら、もう片方の手を結合部へ伸ばす。と――。

「んくぅぅぅっっっ!?　あぅっ、ふっ……あっ、ひっ……いえ、へ、平気、で……んはぁっっ♥　はふっ、ひ、ちが、ひっ……んくぅぅっ！　ちがふ、れすっ、いまのぉ……」

不意に彼女がビクンッと背中をはね上げ、真っ赤に染まった汗塗れの顔が、髪の毛をフワリと舞わせて上を向いた。白い喉を晒し、緩みかけていただけの唇が大きく開き、また も呂律の回らなくなった嬌声が、甘く熱く喉奥からもれ溢れてくる。

（……あれ、これ……もしかして、ラピスのやつ……）

指先が触れただけの淫核を、もう少しだけ強く摘んで軽く捻る。

「んひふぅぅっっ♥　んぁっ、ら、らからぁ、そこ、ひゃらっ……ひゃらぁぁっ♥」

小さく捻るだけラピスはひたすらに声を喘がせ、春輝の胸板に頬をすり寄せながら腰を躍らせた。小刻みな動きに合わせて肉棒を突き入れると、キツく締まった膣肉がたちまち蕩け、牡を歓待するような熱烈な愛撫で、奥深くへ吸い上げてくる。そうして快楽の中で咀嚼され、ようやくペニスを根元まで押し挿れたときには――すでにラピスの唇はこぼれた涎でドロドロになり、瞳は快感に染め上げられ、うっとりと細められていた。

「な、なぁ……その……もしかして、クリ弱い？」

「ふぁ……んっ、ば、ばぁな、ころぉ……い、いわない、れ、くら……ひゃ、い……んくっ、くふぅぅんっっ♥　ひゃっ、ひがっ……わ、わらひは、あくま、れふよっ……に、にんげんろ、あ、あい……ひゃふっっ！　あいぶ、なんか、れぇ……んぅぅっ♥」

彼女の苦しい言い訳を聞きながら、宥めるように角を撫で、クリトリスの弾力を楽しむように、少し強く押し潰しただけで、面白いほど簡単に悪魔少女の声が蕩けだす。それだけではない、クリトリスを指の腹で転がすたびに、柔らかな淫肉たっぷりの蜜壺がリズミカルに締まり、蠢動する粘膜がハムハムとペニスを甘噛みし、しゃぶってくれていた。

なにより、言葉ではその快感を否定するくせに、両手をしっかりと春輝の首に回して抱きつき、声を蕩かせながら胸板に頬擦りし、何度も鎖骨へ口づけを浴びせてくる。その仕草があまりに可愛らしく、つい彼女の耳元に唇を這わせて耳朶をしゃぶってしまうと、声にならない喘ぎを響かせて背中を丸め、ビクビクッと身を捩って快感に悶えていた。

「んはぁうぅぅぅ〜〜〜〜っっっ!! はっふっ、ひょれっ、しょれぇぇ……んぁっ、んっ、しょくっ、はんそくぅっっ！ しちゃっ、らめっ、いっしょらめぇっ♥」

（やばいっ……完全にラピスがデレてる……快感でおかしくなってるのかしんないけど、もうなんていうかっ……女の子の可愛さ全開で、俺のこと落としにきてるっ……）

角から手を離すと、ピクンッと小さく身を跳ねさせて、拗ねたような表情が上を向いた。もっと頭を撫でろ、髪を梳け、角を扱けと命じるような視線を受け——春輝は彼女のあごを持ち上げると、唾液塗れの小さな唇に、そっと唇を宛てがう。

「んちゅっ……ちゅぅぅぅっ、じゅるっ、じゅるぅぅ……れろっ、ちゅぶ……」

「んんむぅぅぅっっっ♥ はぁむっ、んちゅむっ、ちゅぱっ、ちゅばぁっっ……あむちゅっ、ちゅっ、じゅるるるぅぅっっ……くちゅくちゅっ、じゅるるんっ……コクッ……」

こちらからするのは唇を押し当て、少しだけそれを開くだけでよかった。別にマスターのことなんて――と春輝を突っぱねていた悪魔さんの唇は、夢中になってこちらのキスを歓待し、唇を飲み込んで隙間から舌を抽挿し、溢れる唾液を啜り上げてくれる。

（はぁぁぁぁ……最ッ高だな、これ……ほんっと、悪魔じみた可愛さだわ……）

快感に蕩けきった悪魔の姿に官能が昂り、ペニスはさらに膨張して、狭まった肉壺を押し広げてゆく。内から圧迫される刺激にビクビクッと跳ね、プリプリの柔らかヒップを振り乱しながら、ラピスは小刻みに腰を使い、春輝の牡をねっとりと扱き立てた。

「あひゅっ、んぁっ、ふあぁぁんっっ！　あんっ、んっ、ま、まふたぁっ、うごいひゃっ、らめっ、ひゃらぁぁっっ！　あうぅぅんっ、んぁっ、ひゃぁんっっ！」

自分が動いているということに気づきもせず、抗議の喘ぎをもらしながら、数センチほどのストロークでお尻が揺すられる。それでも、ペニスの根元を噛み締める膣口の感触と、四方八方からペニスに絡みついて、肉棒全体にむしゃぶりついてくる粘膜襞に扱かれてしまえば、暴発しそうなほどの圧倒的な快感が込み上げた。

「んふぁぁっっ……はぁっ、んっ、んくっ、くはぁぁんっっ♥　ますっ、たぁっ……んぐっ、ふみゅっ、ちゅぅぅ……んちゅっ、ちゅぷっ……ぷぁっ、はふぅ……」

内圧の高まりにキュンキュンと膣肉を疼かせながら、切なげな視線で少女の瞳が春輝の唇を見つめていた。意図を察して唇を重ねると、先ほどのように強くむしゃぶりつき、熱く弾力ある舌先が小刻みに跳ね、子犬が甘えるように舐め回してくる。

（もぉぉっっっ、可愛いっ、ラピス可愛いよぉぉぉっ！　このまま思いっきりだしてぇっ……ラピスの膣内の、一番奥にっ……俺の、全部だしちまいたいっ……）

込み上げる牡欲を抑えきれず、愛液やら汗やらでびしょ濡れになった布団に彼女を押し倒すと、啄むようなキスを繰り返す。そうしながらようやく本格的に腰を使おうと、ラピスの細い腰を抱いて押さえつけ、ゆっくりと肉棒を引き抜いてゆく。

――ジュルゥゥウッッッ、グプププッ、チュブンッッ……ジュブゥゥッッ！

「ふぁうううぅ……んくっっ、くあぁぁぁんっっ!!　んはっ、はっ、ふっっ……ぁっ、んくっ、くぅぅんっっ……はふっ、いひっ、いい、れすっ……ましゅたぁっ、もっと……もっと、してっ、くださいっ……あんっ、んあぁぁっっ♥」

吸いつく粘膜を引き剥がしながら抜いたペニスを、再び最奥まで叩きつける。柔らかく蕩けた子宮口がキュゥンッと締まり、敏感な亀頭に咥えついて、チュウチュウと吸い上げられた。その熱烈で卑猥な牝口づけを受けて、春輝はラピスに唇でのキスを返す。

そうすると今度は脚が腰に絡み、彼女の淫唇と子宮口が、さらに濃厚なキスを浴びせて精液を吸いだそうとする。陰嚢がせり上がる快感に思わず動きを止めてしまうと、隙ありとでもいうように微笑んだ唇が、上のキスの主導権をも奪い去ってゆく。

「んむぅぅぅっ、ちゅっ、ちゅぱっ、ちゅぱぁっ♥　はむぅっ、あむっ、あぁ～むっ♥　んじゅっ、ちゅるぅぅ……ちゅぱっ、はぁっ、はぁぁ……あっ、んっ……んれろっ、れろぉぉぉ……じゅるるるっ、れりゅっ、ちゅるぅ……くちゅっ、ぐちゅぅぅ……」

涎塗れの唇を舌先で丁寧に拭ってやるも、すぐさま汚し直すように、唾液をたっぷり乗せた舌が絡みついてくる。吸われた舌が唇に食まれる、その快感に甘えながら舌を抽挿しつつ、腰の動きを少しずつ早めてゆく。押さえる脚が弛緩しているのか、スムーズに動きだしたストロークを叩きつけるたび、パチュンッッ！　と水音が響いた。同時に彼女の腰が跳ね、お尻が浮いて柔らかな肌が太ももを甘く撫で上げる。

（はふぅぅっ……あぁぁっ、ラピスッ、ラピスラピスラピスっっ……）

互いの体液でドロドロになりながら、上下の粘膜で濃厚に繋がっていると、そのまま溶け合って一つになってしまいそうだった。腰がぶつかり合うたびに、快感が一足飛びに頂点へ向かい、精液がグングンと込み上げてくる。

「まひゅっ、はっ……はぁっ、はむぅっ、んぁっ……」

顔が近づくたびに舌を吸い、キスをせがんでいた悪魔少女が、切なく啼いた。

「まひゅたっ、もっっ、わら、ひっ……そ、そろそろ、れしゅっ……んっ、く、くらさいっ、まふたっ……ますたぁっ、マスターっ♥」

そう声にだしたことで、彼女自身が強く意識したのだろう。膣肉がうねるように蠢動を繰り返し、蜜液塗れの粘膜がビクビクッと痙攣し始める。

「おっっ……けぇっ、俺もっ……そろそろ、限界だしっ……くぅおっ！」

クールな彼女の甘えたおねだりを聞かされ、肉棒は完全に発射態勢だった。前立腺がギュッと窄まり、精液を後押ししてくるのをなんとか抑え込むと、最高の射精を求めて懸命

に腰を振り、肉棒で彼女の膣肉のあちこちをこそぎ突いてゆく。
「んはぁぁっっっ！　あぐっ、はぅっ、はぁぁっっ……んまっ、まひゅ、はっ……あうぅぅんっっ！　そんらっ、奥っ、奥はっっ……はぁぁぁっっ♥」
蕩けた粘膜がグチュグチュと掻き回され、うねりながら何度も吸いつき、絶頂間近の蠢動を春輝に訴える。次第にラピスの腰は高く浮き、こちらが腰を振るのも難しくなるほど脚が抱きついて、肉棒を噛みちぎらんばかりに膣口が締めつけられる。
狭まった膣道を引き抜いた肉傘が抉る、そのたびに悪魔少女の声は甲高く上擦って、絶頂に近づく官能の昂りを訴えていた。
「もふっ、もっ、ひゅぅぅんっっ！　んらっ、らめっ、あっ、あっあっ♥　んぁぁっ、あぁぁっ、だめっ、だめぇぇえっっっ！　ますたっ、イクッ、わらひイキますっ、イキますっ、マスタぁっ、オマ〇コイクッ、イキますぅっっっ♥　ふぁっ、ふあぁぁっっ！」
絡みついた腕が身体を抱き寄せ、背中に爪が食い込んでくる。その痛みが彼女の快感の結果だと思うと、身体を離すことなどできなかった。同じように春輝も彼女を抱き、上向いた唇に吸いつき、腰を叩きつけて膣最奥に亀頭をグリグリと押しつけてやる。
「んきゅぅぅっっ！　んくぅぅっ、ひくっ、あひっ、ひくっ、イクッイクイクッ♥」
ビクゥッッッ！　と彼女の背中が反り返り、入口と中ほど、そして最奥と三箇所がキツく引き締まる膣壺全体が、痙攣しながら肉棒に甘噛みを繰り返す。子宮口が亀頭にキスしてチュウチュウと吸いしゃぶる、それに合わせて膣肉がざわつき、根元から――さらにそ

の奥から精液を誘って扱き上げ、ペニスの快楽を頂点にまで導いてゆく。
（くあぁぁっっっ、あぃっ……イクッ、俺もイクッ……イクッ、ラピスぅぅっ！）
――ビュックゥゥゥッッッ……ビクビクビクンッッッ！　ビュクビュクビュクゥゥゥ～～～～～～ッッッ、ビュルルルッッ!!　ビククッッ、ドビュルゥゥゥッッ！
「～～～～～～～～～っっっっっ♥♥　あっひっ、はひっ、はひぃぃぃっっ……」
目の眩むような快感に前立腺を捏ね回され、ペニスを舐め回され、激しく扱かれてしまうと、下半身の痙攣が止まらなかった。尿道が壊れてしまったかと思うほどの肉悦が迸り、大量の精液塊が跳ね、少女の熱い胎内へドプドプと勢いよく注ぎ込まれてゆく。
「ひゃふっ、はっ、れ、れへりゅっ……れへまふぅっ、まふたっ、ますたぁっ♥」
「ちょっ、まっ……腰っ、使う、の……はん、そ――あぐっ、くぅぅぅっっっ！」
精液が噴きだし、肉棒が跳ねるたびに彼女が腰をカクカクと振り、射精を助けて精液を搾り取ってゆくのを感じる。それ自身が意思を持った生き物であるかのように、膣肉がうねり続け、密着したままの粘膜がペニスを扱く、まさに悪魔とのセックスだと思えるくらいの、人外に与えられる快感の嵐だった。
（――だっていうのにっ、これ、なんだよっ……すげえ、幸せっ……）
強い依存をもたらす媚薬のような快楽なのに、精液を放出するたびに、心の奥がホンワリと温かくなってくる。それは彼女の膣内の具合の良さが与えてくれるのか、この密着感による錯覚なのか――それとも、彼女が間近で見せる笑顔が、春輝の心に訴えるのか。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!